人口8万5000人達成 まちの勢いを維持したい

ビジネスチャレンジでまちの活力UPへ

本市は令和4年1月、人口8万5000人を達成しました。

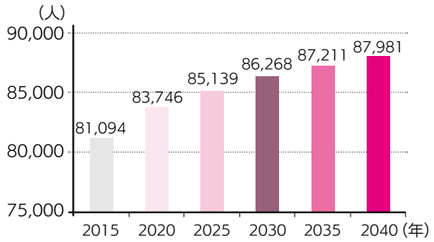
日本全体ではすでに人口減少が問題視されていますが、本市の人口は2040年ごろまで緩やかに増加が続き、その後減少に傾いていくと推定されています。

本市の掲げる「起業家の集まるまち」の将来ビジョンは、起業創業したい人の支援を通じて、活力ある開かれたまちの空気を醸成することにあります。

起業家にとっても市民にとっても「選んでよかった」「住んでいてよかった」と思ってもらえる、人が輝く「豊かな田園都市」の礎を築いていく狙いがあります。

人口8万5,000人達成のセレモニー

守山市の人口ビジョン（目標値）



第5次守山市総合計画より

起業家の集まるまちを目指して、本市で実施していること

地域・未来ミーティング

起業家の不安に地域ぐるみで応えるために、行政をはじめ金融機関などが意見交換の場を設け、情報共有を行っています。

守山市しごとはじめ支援協議会

創業希望者や創業者に対して、相談窓口や創業セミナーの開催、補助事業など、関係機関が取り組む創業支援事業へつなげるため、本市、守山商工会議所、みらいもりやま21、金融機関などで構成する「守山市しごとはじめ支援協議会」を組織しています。

職業・仕事を学ぶ「夢プロジェクト」

守山のまち、仕事、起業の魅力に子どもの時から興味を持ってもらおうと、市内の起業家などを講師に迎え、小中学校でキャリア教育をしています。

民間複業人材と高校生の交流

民間複業で本市を支援する行政アドバイザーと、起業に関心のある学生たちが交流して、体験を語ったり、アドバイスをしたりしました。

もりやま創業塾「私の、未来計画」

市の委託を受けて、創業希望者などを対象に、守山商工会議所が起業家や実務についての講師を招いて創業セミナーを開催しています。

クラウドファンディング活用支援

新たなチャレンジをする人が新しい生活様式の推進などに向けてクラウドファンディングを活用する際に、費用の一部を補助しました。

チャレンジする人が集まれば熱量と活気にあふれたまちになる

「起業家の集まるまち」で住みやすさ＋αの未来を

全国的に人口減少が問題となる現在も、京阪神のベッドタウンとしての機能に住みやすさも加わって、本市では人口増加が続いています。しかし、増加基調は2040年ごろまでと言われています。

本市はスモールパッケージ、コンパクトシティを実現していると思いますが、将来ビジョンには住みやすさに＋αの魅力と活力が必要となります。

そこで、本市は新たな雇用の創出や地域活性化に向けた、地方創生総合戦略のキーワードに「起業家の集まるまち」を掲げています。

チャレンジの熱気と活力でまちの魅力をアップする

起業家の集まるまちは、市民生活や行政サービスとどう関係するのでしょうか。

目指しているのは「企業の集まるまち」でも「起業のまち」でもなく、「起業家の集まるまち」です。

起業家とは「新しいことにチャレンジする熱気と活気のある人」のことで、その代表となるのが、ビジネスの創業起業を目指している人です。

「起業家の集まるまち」の将来ビジョンは、「守山の財産は人である」という理念の延長にあるものなのです。

ベッドタウンの人口増の要因は、居住地として本市を選んでくれた働き盛り・子育て世代などが転入していると推察できます。一方で、大学進学や就職を機にふるさと守山を離れてしまう若者も多くいます。

起業家の熱量と活気、起業家の副産物として生まれるまちの魅力で、ふるさと守山を離れた若者や県外市外に住む人が、守山に興味を持ち、目や足を向けてほしい。そして行政と市民が協働で、起業にかかわらず「新しいチャレンジをしたい」人たちを受け入れる土壌作りをしていこうと考えています。

まちの雰囲気を盛り上げてビジネスの循環を活性化に

新しいビジネスにチャレンジする人は、地域の課題をビジネスとして解決につなげてくれるかもしれません。例えば、空き家・空き店舗に飲食店が入れば「空き家対策」。従業員を雇えば「雇用創出」。市民の選択肢が増えて「市街地の魅力アップと活性化」になります。起業家が起こすビジネスの循環が、地域全体を活性化してくれるはずです。

施設建設のような見えやすいものではありませんが、まちの将来を大きく輝かせる政策だと思っています。市内に点在する民間主導のコワーキングスペース（環境の縛りがない人の共働ワークスタイル、実務環境や設備を共有する場所）やコミュニティは、チャレンジを受け入れるまちの雰囲気と機運の表れではないでしょうか。

地域振興課 係長
杉本（すぎもと） 悠太（ゆうた）さん

地域振興課 主任
西村（にしむら） 祐紀（ゆうき）さん

起業家のゆりかごが まちの ポテンシャルを上げてゆく

オープンマインドな コミュニティは 起業家のゆりかご

上原さん：「起業家の集まるまち」には、オープンマインドなコミュニティが点在する爽やかなまちのイメージがあります。

守山は起業家にとってもよいゆりかごになりはじめていると思います。※1スタートアップゆりかごの代表がコワーキングの点在や、中野さんが主催するスタートアップを目指す人たちの交流会。飲食しながらいろいろ話しているだけですけど、講演会やネット上の体験談よりずっと身近です。※2スモールビジネスゆりかごの代表が清原さんの主宰する、地元の起業家が中心になったコミュニティ「エンテラスモリヤマ（以降、エンテラス）」だと思います。

中野さん：コワーキングの目的はそれぞれです。滋賀産業プラザなど行政が運営しているコワーキングは起業支援に特化しているのが一般的なのに対して、民間のコワーキングは多様な人たちのコミュニティの場やセカンドオフィスを狙っています。

民間のコワーキングが点在しているところが、守山の特徴であり、「起業家の集まるまち」として一歩進んでいる印象です。

清原さん：私は3代目の後継者ですが、既存事業の継続だけで乗り切れる時代ではないし、起業創業した人たちの話が聴けたら勉強になると考えて有志に呼びかけたのが「エンテラス」です。

「エンテラス」という一つのきっかけができると、起業家同士が想定以上の勢いでつながっていきました。コミュニティがどれだけ求められていたのか分かります。チャンスをもらったり与えたり、新しいことをやりたい時に背中を押してくれる。私が市内外の他企業や団体と連携して新しい商品開発できたのも、コミュニティの刺激と影響があったからだと思います。

岸本さん：「エンテラス」ができたころ、私は他店にいました。起業する人も含めて、新しい人を受け入れるポテンシャルが、以前より圧倒的に上がっていると感じています。信金の店舗の中でも特殊なまちという見方をしていました。

金融機関はビジネスとビジネスをつなぐと思われますが、地域に近い信用金庫は人と人、志と志をつなぐことで面白い化学反応ができるのではないかと思っています。「起業家の集まるまち」のイメージは、私たちの目指すものと重なるのかもしれません。

チャレンジすれば まちも人もすべて 起業家になる

上原さん：守山は同時多発的にコミュニティができたという印象があります。それこそ「起業家の集まるまち」に向けた土壌ができてきた証ではないかと思います。起業家にとっていろいろなコワーキングが分散しながら形成されているのは、自分に合ったコミュニティを探せるので大きなメリットです。

コミュニティは市民に対しても開かれていて、いろいろな情報と交流が得られます。創業を目指す人だけではない、サラリーマンでも、学生でも、後継者でも新しいことにチャレンジする人は起業家といえます。市の職員にだって起業家はいます。

清原さん：まちの土壌を創るという機運は3年ほど前から感じるようになりました。市役所の行政職も以前より柔軟な考え方をしているように思います。

商工会議所の創業セミナーでは、受講生だった人が起業して次の講師になり、実体験を話すようになってきました。身近な起業家の先輩とつながることは、起業を目指す人にとっても心強いのではないでしょうか。

中野さん：チャレンジして業を起こす人はすべて起業家という考え方はその通りです。誰でも起業家になり得ます。そして、近くに起業家がいるまちは、市民が何かに挑戦したいと思った時にハードルを下げてくれます。

例えば趣味や特技を生かしてスモールビジネスを創業としたいと思っても、いきなり商工会議所や金融機関に相談に行くのはハードルが高い。身近なコワーキングやコミュニティでなら相談しやすいという利点があります。

岸本さん：京都信用金庫には、起業家を支援するうちに自分も起業したくなったら果敢にチャレンジできる、京信アントレ・サポート制度があります。創業にはリスクもあるので、失敗したら復職して経験を生かして仕事をしてね、という制度です。社内にそんな制度を創るのも一つのチャレンジでしょうか。

京都信用金庫
守山支店長 岸本（きしもと） 恵太（けいた）さん

株式会社 マイネット
代表取締役 上原（うえはら） 仁（じん）さん

守山市しごとはじめ支援協議会（京都信用金庫）、守山市出身・東京在住の上場起業経営者、守山のコワーキング経営者、地元企業3代目（後継者）に、「起業家の集まるまち もりやま」を語り合っていただきました（会場：Future lab）。

しがとせかい（コワーキング経営）
代表取締役 中野（なかの） 龍馬（りょうま）さん

株式会社 清原
代表取締役 清原（きよはら） 大晶（ひろあき）さん

多様性を受け入れる 風通しのよい 爽やかなまち

上原さん：私たち起業家は、正直なところ行政区とか自治体とかで場所を選んでいるわけではありません。いいな、と思って選んだのが、たまたま守山だったということです。

中野さん：私もはじめから守山でコワーキングを開くと決めていたわけではありません。たまたま相談をしたら対応が早くてそのスピードに驚きました。自分の主張をしっかり持って事業にしているプレーヤーが多く、同業者でも「いいライバルやったな」という感じでスポーツ漫画みたいに爽やかでした。それで守山が面白いと思ったのです。

上原さん：カラッとすっきりスピード感がある体質。風通しがよくて爽やかな感じが「起業家の集まるまち」に合っている。良い意味で合理的な側面のあるまちです。人口増加をはじめとする都市の成長が続いていること、市長の強い姿勢が爽やかさの理由ではないでしょうか。

岸本さん：スモールビジネスは地域課題の解決やまちのにぎわい創出につながるし、スタートアップ起業は世界を視野に入れて夢がある。「起業家の集まるまち」はそういう元気なまちを創ることではないかと思います。

清原さん：コロナ禍でも前向きに取り組んでいる様子が新聞に載った時、地域の人に「がんばっているね」と声をかけられ、とてもうれしかったです。地元住民の私でもそうなのだから、起業創業にチャレンジしている人はもっとではないでしょうか。

中野さん：守山の起業家にとって守山に住む市民の声や情報が力になります。それは、今までの自分の経験からも「そういうまちであってほしいな」と実感しています。

上原さん：多様性を受け入れるまちや市民の雰囲気は重要な土壌です。チャレンジする人は独特な感性をもっていることも多いので、話題になった守山の人や商品を「おらがまちの自慢」にして喜んでくれたら、それだけで盛り上がります。

※1スタートアップ…今までにないビジネスで、極度な成長を目指す起業。

※2スモールビジネス…地域課題の解決や人々のニーズを満たすような起業。

創業する〝ひと〟がつながって まちや地域の〝面〟の活気になる

夢と決意の起業家を支援 きわ立つまちの本気度

日本政策金融公庫は、中小企業や小規模事業者、農林水産業、新たな事業をはじめる人などに金融機能を発揮している政策金融機関です。全国でも地方創生の一環として企業支援を進めている自治体は多く、移住を促すような政策や企業誘致を推進する政策など、さまざまな取り組み方をしています。

多くの自治体で政策に取り組むのは職員が中心ですが、守山市は「起業家の集まるまち」を目標に掲げて、市長自ら前面に立って起業支援に取り組んでいます。その熱量というか、本気度というのは全国でも際立っているのではないかと思います。

一人の起業家が約3人の雇用を創出するというデータもありますので、地域や行政にとっても起業支援にはメリットがあります。一方で起業にはリスクもありますから、心配や不安は相談に来られる皆さんが持っています。それでも、大きな夢や決意と緻密な計画をもって創業に挑むのです。

コミュニティに集まる 交流と情報が心強さに

実際に起業するまでは、私たち金融機関をはじめ、商工会議所や創業支援プラザ（滋賀県）などで相談や面談を行っていますし、ある程度の支援体制があります。創業塾やセミナーなどで育んだ相談相手や仲間も、実際に起業した後は業種や規模もばらばらですので孤独を感じるという起業家の声を聴くこともありました。

起業する人たちは、情報と仲間を求めています。起業家や市民がともに情報共有することができ、起業家の熱量を身近に感じることができる場として、コミュニティが役割を担っているのだと思います。

起業家を受け入れて 地域マインドを高める

事業を一から立ち上げるというと敷居が高いように感じるでしょうが、日常の買い物一つ、外食一つとっても、すべてがビジネス場面（シーン）なのです。起業家の支援は市民の生活そのものに直結しているといえます。商工会議所や金融機関など専門機関だけではなく、市民一人ひとり、行政も起業支援に力を入れることは、地域マインドを高めていくことにつながると思います。

そうしたマインドが形になったのが、市内に点在する民間主導のコワーキングや、ピッチ（短いプレゼン）にチャレンジする子どもたちではないでしょうか。

日本政策金融公庫は「守山市しごとはじめ支援協議会」の構成メンバーですし、「地域・未来ミーティング」にも参加させてもらっています。

ミーティングでは、全国・世界で注目される事業者や近畿財務局など、こちらが驚くような講師陣やゲストティーチャーが参加することもあります。冒頭にお伝えした市長をはじめ守山市の熱量と本気度が伝わってきます。しかし、関係機関だけでどうにもならないのがまちの雰囲気づくり。市民の一人ひとりが起業者を温かく受け入れ、応援する気持ちをもっていただけたらと思います。

日本政策金融公庫 大津支店長
橋本 元気さん

あたらしいコトにチャレンジする 新しい自分、未来へつなげたい

起業家を目指して活動している、立命館守山高等学校3年生の奥西 授さんと中井 咲希さんを取材しました。

起業を目指している立命館守山高等学校3年生の中井 咲希さん（左）と奥西 授さん（右）

キャリアチャレンジから 本物の学生起業家へ

立命館守山高等学校3年生の奥西さんは今春、中井さんは大学進学後にベンチャー（企業で勉強し、1年後の起業を目指しています。

校内のコネスコ委員会（社会課題に関心のある有志組織）に入り、個人やチームで〈新規ビジネスのアイデアや経営プランを立て、ピッチ（短いプレゼン）を行う活動をしてきました。守山市で地域の魅力や課題からビジネスプランを作りあげる、「もりやまキャリアチャレンジ『びわ湖ピッチ2021』」にも参加して、中井さんのチームが最優秀賞に輝きました。奥西さんは立命館グループ全体のピッチチャレンジに参加して総長賞（最優秀賞）という成績を残しました。

そのほかにも、同校・他校生徒とチームを組んでさまざまなピッチに参加したり、起業家や行政など大人と交流したり、授業では学べない経験を重ねて、学生起業を決意したそうです。

＜主な受賞歴＞

奥西さん
- 総長ピッチチャレンジ2021総長賞
- ソーシャルイノベーションチャレンジ日本大会ファイナリスト

中井さん
- びわこピッチ2021最優秀賞
- ソーシャルイノベーションチャレンジ日本大会ファイナリスト

活動では大人も対等 すべてがイノベーション

奥西さんは1年生の時に先生の勧めで、校内の有志組織に参加しましたが、当初は起業など考えたことはありませんでした。中井さんも明確に起業を考えていたわけではなく、2年生の時に興味があって参加しました。

ピッチチャレンジには、自分の考える夢やプランを形にする面白さがあります。また、東京で仕事をしながら複業として行政アドバイザーを務めた人、金融機関や市の職員、実際に起業した人など、普通の高校生活では関わらないような人たちとのつながりもできました。アイデアを膨らませ、そういう大人と対等に質問や意見をぶつける経験を、守山というフィールドでできたことすべてがイノベーション（革新的な価値）になりました。

もちろん、校内の有志組織活動と自分が本当にやりたいスタートアップ起業のプランは違います。奥西さんと中井さんは経験を元にブラッシュアップして未来につなげたい、と話していました。